

佐高信

官僚たちの

志と死

講談社

官僚たちの 志と死

佐高信

講談社

かんりよう
官僚たちの志と死

著者 佐高 信
さたか まこと

一九九六年三月二二日 第一刷発行

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社



東京都文京区音羽二―二―二 郵便番号 一〇二―〇一
電話 編集部 (〇三)五三九五―三五〇五

販売部 (〇三)五三九五―三六二二

製作部 (〇三)五三九五―三六一五

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社若林製本工場

定価はカバーに表示してあります

© Makoto Saraka 1996. Printed in Japan

落し本・乱し本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えいたします。
なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第二出版部宛にお願いいたします。本書
の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

ISBN4-06-208107-5

(文二)

目次

自殺を選びし者

5

通産省の殉職者

81

総理の座を蹴った男・伊東正義

151

あとがき

224

装丁
安彦勝博

官僚たちの志こころざしと死

自殺を選びし者

その日、山内知子はどうしても家にいられない。夫の豊徳とよのりが自宅で首を吊つった一九九〇年十二月五日から四年も経たっているのに、知子は家を離れなければならないのである。

九四年のその日も、前日の朝、都下の町田市薬師台の自宅を出て、母親と共に京都に向かい、西本願寺の隣の東急ホテルに泊まって、五日朝十時に本堂にすわった。

午前十時が検死の結果の死亡推定時刻である。知子が二階で夫の変わり果てた姿を発見したのは午後二時だった。その間四時間、疲れている夫を寝かせておこうと思った自分を、いま、悔いる。

一九九〇年十二月四日午前九時、当時、環境庁企画調整局長だった山内豊徳から知子は、「僕はこれから失踪する。これ以外に北川長官の水俣みづまた行きを止める方法がないんだ。役所はやめることになると思う」

という電話を受け取った。前夜初めて無断外泊した夫の憔悴しやうすいし切った声だった。水俣病の

救済問題で追いつめられていることは知っていたが、そこまで苦しんでいるのか、と知子も動揺した。

町田の自宅から霞ヶ関の環境庁まで往復三時間かかる。夫の過労を心配した知子は、遅くなる時はホテルに泊まってくれ、と言った。

それで、豊徳はしばしば都内のビジネスホテルに泊まっていたのだが、三日の夜は几帳面な彼には珍しく連絡がなく、そして、四日朝の電話を受けたのである。

心配していると、昼近くにまた、豊徳から電話があり、これから帰るということだった。知子はいま、こう考える。

夫はあのとき、死にどころをさがして、結局死にきれなくて自分のもとに帰って来たんだ、と。

とにかく、昼過ぎに帰って来た豊徳は精も根も尽き果てたようだった。立っているのがやつつという感じの夫を、お願いだから休んでくれと二階の寝室に行かせたが、まもなく豊徳は降りて来て、環境庁へ電話をかけた。

運命の五日、豊徳は環境庁長官だった北川石松と共に水俣へ行くことになっていた。大臣が現地へ行くというのも異例なのだが、その際、手ぶらで行かせるわけにはいかない。

何らかのおみやげ、つまり、具体的前進策を持参しなければならないのだけれども、それがない。まして、大蔵省出身の次官、安原正は、北川の現地行きさえ苦々しく思い、それを

止められなかった山内に批判的だった。もちろん安原は、水俣病患者と和解して補償を始めなければならなくなることを恐れる大蔵省の意向を背負っている。厚生省出身の山内とは、まったく言っていないほど考え方が違い、山内はギチギチと板ばさみの輪を狭められる苦悩の日々を送っていた。

それで山内は、自分が雲隠れすることによって、北川の水俣入りを阻止しようと考えてる。

正式に辞表を書き、職場放棄をして責任を逃れるには、山内はあまりに誠実だった。無責任という批判ほど、山内に堪えるものはない。責任という十字架を片時も離すことなく生きているような山内にとって、一度は役所をやめると決心しても、代わりに誰が行くことになるのか、気になるのだった。

窮余の一策とはいえ、自分が失踪することによって北川の水俣行きを阻止できるかもしれないと考えた山内の判断は、役所以外の人間には理解できない。いや、役所の人間でも首をかしげるだろう。

「次官はどう言ってらっしゃる？」

こんな応対をしながら、環境庁に電話をした山内は知子に、水俣へは代わりに官房長の森仁美が行ってくれることになった、と伝えた。

そしてその夜、山内豊徳は二人の娘と妻に、どうしても水俣の仕事はやりたくないから役所をやめる、と告げる。

長女は短大を卒業して就職していたが、次女は高校三年で、獣医をめざして受験勉強中だった。

不安がる娘を、夫にかわって知子が、大丈夫よ、と励ました。

このとき、知子は、豊徳をも母親として抱えるような感じだった。

その夜、彼女は二階の寝室をのぞき、豊徳に、

「眠れる？」

と声をかけている。

知子がカゼを引いたのがきっかけで、しばらく前から彼女は一階に寝ていた。それもいまは後悔の種である。悔いは次々と湧いてきて尽きることがないのだ。

そして翌五日。午前七時に出勤する長女を見送った豊徳は、八時に知子が犬のゴロウを連れて散歩に出て九時ごろ戻ると、パジャマのまま食卓で待っていて、スープだけを飲み、昼まで寝るからと言って二階に上がった。

多分、知子に最後のお別れをしたのだろう。

昼を過ぎても豊徳は降りて来なかった。それもそのはずで、すでに十時に彼は還らぬひととなっていたのである。

午後二時になっても起きてこないの、知子は不安を抱いて二階に上がった。

そして、夫の姿を発見し、勉強部屋にいた次女を呼ぶことになる。

筆者が山内宅を訪ねたのは、九四年の十二月三日だった。表札は山内豊徳のままである。

「一本横棒が多い徳の字を自分で頼んで来たんですよ」

知子は私にこう言い、私が、

「知人の奥さんが、夫が亡くなっても夫の名前で手紙が来るのは、まだ生きているような気がして嬉しい、それでも、やはり、だんだん少なくなりますと言っていました、そんな気持ですか」

と不躰がじつけに尋ねると、

「表札も同じですよ」

と笑った。

しかし、もちろん、笑みが戻るのには時間がかかった。私が知子に話をしている間も、まるで彼女を守るかのように、しきりにそばに来て私に吠えるゴロウも、知子の異変に、一カ月余り寄りつかなかったという。夫を喪うしなつて平衡感覚を保てない彼女が、犬にも恐かったのだろう。

「しかし、ゴロウがいて助かりました。動物は人間にとって救いですね」

五日、自宅にいて豊徳の縊死いしの姿を見たのは知子と次女である。多感な次女は、よく父親とケンカをしていた。父親にとって娘の反抗は気にするほどのものではないのだが、逝ゆかれてしまった娘にとっては心に残る。まして、最期の姿を見ているのである。

知子は、早く次女をこの家から解き放してやった方がいいと思った。その日にここにいられないのは自分だけではない。次女もそうなのである。

幸い、次女は医科大学に入り、現在、地方の都市で学生生活を送っている。

この次女が「宝物」として大事にしているのが、厚生族の実力者、橋本龍太郎から来た手紙である。

豊徳の死後まもなく、

「山内君はすばらしい男でした」

という手紙を知子と家族宛てによこした橋本は、一九九二年十二月五日に山内豊徳の遺稿集『福祉の国のアリス』が八重岳書房から刊行されると、それを読んでの感想をまじえて、再び、次のような手紙を送って来た。日付は同年十二月二十一日である。

『福祉の国のアリス』を読み終り、もっと山内君を知るべきであつたと今悔いております。私が厚生政務次官の終り近く、彼が年金課に帰って来、挨拶に見えたのが初めての出逢いでした。以来、随分仲良くして来たつもりでしたが、生い立ち等これを読むまで知らなかっただけに今本当に残念です。

私も生後半年で母をうしない、六歳の時新しい母をむかえて仲々なじまなかっただけに彼のおさない頃を知っていたら異った交際も出来たのでは？　との思いが今胸中を去来してお

ります。「つくも」の中で語られている一つ一つが私の心に何よりもひびきました。仕事で話しておられる物もそれぞれ立派な中味を持つ文章ですが、「現れない母親」等にのぞく山内君の姿に彼の心をのぞかせてもらったような思いがしました。

編者あとがきの中、三三九頁の途中まで読んだところで、ついに涙がおさえられなくなりました。「やりたくない仕事には向かえないんだ」、こんな言葉をはく状況、何故私達に一言でももらしてくれなかったのか、本当に残念です。

同時にそこまで考えぬいている事を何故察する事が出来なかったのかと自分を責めております。本当に申し訳有りませんでした。

「父へ」の中にあるように、私もまた、何時の日か彼とゆっくり話し合える日がくるのを楽しみにしております。

どうか御家族の皆さん、山内君の分まで強く生きてくださいますように。私で役に立つ事が有りましたら遠慮なくおっしゃって下さい。御自愛を祈ります。

直線が伸びすぎるほど伸びた鋭角的な字で書かれた橋本龍太郎のこの手紙は公開されることを予想して書かれたものではない。

それを引用させてくれないかと手紙で依頼すると、直接電話をかけてきた橋本は、「悪く書くんじゃないでしょうね」

と笑いを含んだ口調で尋ね、私が否定すると、

「すばらしい男でした」

と二度、繰り返した。

この手紙は、他人の痛みがわからぬ唯我独尊の政治家という、流布^{るふ}された橋本像に修正を迫るものだが、同じような生い立ちという山内の前半生を描く前に、ここで、橋本についての忘れられぬエピソードを、二、三紹介しておこう。それが、山内の次女の“宝物”の光度をさらに増すと思うからである。

なお、橋本の手紙の中の「つくも」は山内の遺稿集の一節の見出しであり、そこに「現れない母親」も出てくる。「父へ」は、やはり遺稿集に収録されている次女の短い手紙で、それものちに紹介しよう。

さて、雑誌『AERA』の「現代の肖像」で橋本龍太郎を書いたのは吉田司である。吉田は水俣病患者の実態を生々しく描いた『下下戦記』（文春文庫）で大宅壮一ノンフィクション賞を受賞した。

この文庫版のあとがきに、吉田は、大蔵大臣だった橋本にインタビューした時のことを書いている。超多忙の中、十五分の予定で会った橋本は、それをほるかにオーバーして四十五分も話した。予定変更でおろおろする大蔵官僚が出たり入ったりする中である。なぜ、橋本はそうしたのか？